The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語のフォーリナー・トークにおける個人差
Author(s)	小林, 浩明
Citation	日本語・日本文化. 2000, 26, p. 61-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9620
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

<研究ノート>

日本語のフォリナー・トークにおける個人差

小林　浩明

1．はじめに

フォリナー・トーク（Foreigner Talk, 以下ＦＴ）はある言語の母語話者（Native Speaker, 以下ＮＳ）が非母語話者（Non-Native Speaker, 以下ＮＮＳ）への伝達を促進するために使用される言語使用域のことである。長い間、ＦＴの研究はその記述が中心であったが、最近ではＦＴを引き起こす要因（村上 1996）やＦＴの効果（大平 1999）について研究され始め、新たな展開が期待される[1)]。

ＦＴはＮＮＳの言語能力、ＮＮＳとの人間関係、年齢、話題、伝達の方向などの様々な要因によってその様相が左右される。中でも、ＦＴを使用するＮＳの個人差によるところが大きいと指摘されている（Long 1983: 184; 町田 1995: 67）。しかし、従来の研究ではＮＮＳの個人差に焦点が当てられることがあっても、ＮＳの個人差についてはあまり関心が向けられなかった。

そこで本稿では、ＮＳの個人差に焦点を当てるために、ＮＳ一人ずつのＦＴを分析し、ＦＴにおけるＮＳの個人差を浮き彫りにすることを試みる。

2．先行研究

ＦＴにおけるＮＳの個人差に焦点を当てた研究に Wesche and Ready（1985）がある。Wesche and Ready（1985）は英語ＮＳの教授と仏語ＮＳの教授がそれぞれ英語ＮＳとＮＮＳ、仏語ＮＳとＮＮＳの学生を対象に行った心理学の講義を分析資料として、２人の教授による言語調整の個人差を調査したものである。

ＦＴの個人差に焦点を当てた研究は非常に限られているので、ここで簡単に紹介する。

2．1　分析資料

1983年冬期に行われた正規の心理学の講義をビデオテープに録画した。講義は縦断研究用に最終回まで録画されたが、Wesche and Ready（1985）では最初の講義を文字化し、分析資料とした。

被験者は英語を母語とする心理学の教授と仏語を母語とする心理学の教授であり、講義は被験者の母語で行われた。ＮＮＳの当該言語能力は中級の上であった。また、教科書は同じものが使用された[2)]。

2．2　結果

超分節的単位（Suprasegmentals）及び音韻（Phonology）、語彙（Vocabulary）、統語（Syntax）、談話（Discorse）、非言語行動（Non-verbal Behavior）について分析したところ、以下のことがわかった。

（1）仏語を母語とする教授の場合、ほとんどの項目において統計的な有意差が見られなかった。つまり、学生がＮＳであっても、ＮＮＳであっても、大きな違いはなかった。

（2）英語を母語とする教授はＮＮＳの学生の講義の時、長いポーズや短い節をより多く使用することなどで統計的有意差が得られた。

英語ＮＳの教授も仏語ＮＳの教授も程度の差はあれ、学生がＮＳであるのか、ＮＮＳであるのかによって違いが見られたが、それ以上に大きく異なったのは両者の発話スタイルであった。Wesche and Ready（1985）の中で何度も言及されていることは両教授の講義スタイルの差である。両教授のＦＴが異なったのは両教授の個人的な発話の特徴によるからであろうと結論づけている。

3．研究方法

先行研究として紹介したWesche and Ready（1985）では、かなり多くの項目についてＦＴの個人差を分析していたが、被験者は教師であり、教室場面であった。また、被験者はわずかに２人であった。

そこで本研究ではアプローチを変え、教師ではなく大学生を被験者とし、場面を教室外とした。また、被験者を25人に増やし、分析項目を伝達内容に限定した。

3．1　分析資料について

本稿で用いた発話資料は、小林（1996）で収集した発話資料の一部である[3]。ＦＴの研究は妥当性と信頼性の高い発話資料を収集することが重要であるという考えから、以下の条件を設定した。

（1）接触場面と母語場面の両方の発話
（2）データ収集者以外の社会言語学的変数が限定されている発話
（3）内容がある程度コントロールされた発話

まず、条件（1）を満たすために、被験者一名につき接触場面と母語場面の発話を収集した。次に、条件（2）を満たすために、被験者を専攻が文系である大学3、4年生25名に依頼し、会話は全て同じ場所で行った。さらに、条件（3）を満たすために、自由会話ではなく、3コマ漫画を再生するためのストーリー・テリングを行った。

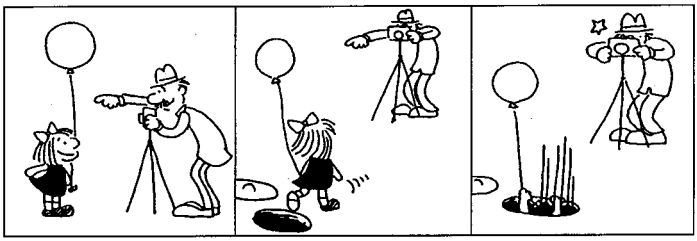
次に、データ収集者であるが、日本語ＮＳは英語教育専攻の大学院生一名、日本語ＮＮＳはルーマニアから来日して9か月目になり、来日前に2年半の日本語学習経験を持つ留学生一名にお願いした。

被験者とデータ収集者は全て女性であり、年齢は被験者の方が2、3歳若かった。また、被験者とデータ収集者は初対面であった。

3．2　発話資料の収集方法について

被験者にＦＴのための会話であることを意識させないために、データ収集者が被験者であると伝え[4]、「ここにある漫画のストーリーをお話ししてください。その話をもとに被験者が漫画を再生します。漫画が再生できるようにお話ください。その時、漫画が被験者に見えないようにしてください。」と書いてある紙を

渡して被験者に指示した。



＜ストーリー・テリングに使用した漫画：Wells (1986)＞

データ収集者には事前に3コマ漫画を見てもらい、収集時には被験者によってデータ収集者の反応が大きく異ならないように聞き手に専念してもらった。

4．分析結果と考察

ＦＴは伝達を促進するために使用され、そして「ことばの置かれている状況が最も顕著に表れるのは、語彙である」（宮本 1996: 101）ことから、伝達内容を分析の項目とした[5]。3コマ漫画を再生するために必ず伝えなければならないのは登場人物であるので、3コマ漫画の登場人物である「女の子」と「男の人」について被験者がデータ収集者に伝えている部分を資料から抜き出した。女の子については7種類、男の人については6種類の描写があった。表1の通りである。

表1　登場人物の描写

女　の　子	男　の　人
・だれか（女の子、娘など）	・だれか（男の人、お父さんなど）
・どんな子（かわいい、小さいなど）	・どんな人（紳士など）
・年齢について	・年齢について
・髪形について	・髭について
・服装について	・帽子について
・リボンについて	
・風船について	・カメラについて

被験者の発話資料を、母語場面を基準として接触場面の方が登場人物に関する描写が少なかった場合を「簡略化」、接触場面の方が多かった場合を「詳細化」

とし、被験者一人一人の発話資料を比較分析した結果、４つのタイプに分けることができた。

４．１　簡略化志向

接触場面の方が母語場面より登場人物に関する描写が少なかった被験者を「簡略化志向」タイプとした。つまり、ＦＴの時、伝達内容を簡略化した被験者のことであり、25人中わずかに２人（８％）だけあった。被験者９を例として表２に示した。

表２　被験者９

女の子	
接触場面	ちっちゃい、女の子、頭にリボンをした、風船を持っています
母語場面	ワンピースを着た、女の子、頭にリボンをしてます 一つで結んでる、おっきな風船を持って
男の人	
接触場面	お父さん、お父さんらしき人、カメラの所に立って
母語場面	お父さんらしき人、男の人、お父さん、カメラを覗いてます ハット　帽子をかぶって、口に髭を伸ばしています

４．２　詳細化志向

接触場面の方が母語場面より登場人物に関する描写が多かった被験者を「詳細化志向」タイプとした。つまり、ＦＴの時、伝達内容をより詳しく伝えようとした被験者のことであり、25人中５人（20%）であった。被験者７を例として表３に示した。

表３　被験者７

女の子	
接触場面	小さな、女の子、幼稚園生ぐらい、大きなリボンを頭にした 髪の毛がこれぐらいの、スカートはいた、風船を持って
母語場面	風船を持った、大きなリボンを頭にした、女の子
男の人	
接触場面	髭を生やした、帽子をかぶった、おじさん、カメラマン
母語場面	帽子をかぶった、カメラマン、おじさん

4．3　無志向

接触場面でも母語場面でも登場人物に関する描写が同じであった被験者を「無志向」タイプとした。つまり、ＦＴが見られなかったタイプであるが、このタイプは25人中10人（40%）おり、今回の被験者の中で一番多かった。被験者２を例として表４に示したが、このタイプの被験者の特徴は他のタイプに比べて極端に伝達内容が少ないことである。

表４　被験者２

女の子	
接触場面	風船を持っている、女の子
母語場面	女の子、風船を持って
男の人	
接触場面	おじさん
母語場面	おじさん

4．4　その他

２人の登場人物のうち、一方の描写だけが多かった、あるいは少なかった被験者は25人中８人（32%）であった。これは「無志向」タイプに次いで多かった。被験者１を例として表５に示した。

表５　被験者１

女の子	
接触場面	風船を持った、小さな、女の子
母語場面	小さな、女の子、風船を持っています
男の人	
接触場面	おじいさん、年をとった、カメラマン
母語場面	帽子をかぶった、髭を生やした、男の人、カメラマン

5．考察

４の分析結果をまとめると、表６のようになる。

表6　タイプ別被験者の割合

タイプ	簡略化	詳細化	無	その他	計
%（被験者数）	8（2）	20（5）	40（10）	32（8）	100（25）

5．1　志向の安定性について

ＦＴが静的ではなく、話題などの様々な状況要因によって変化する動的なものであることはよく知られている。そのため、できるかぎり社会言語学的変数を統制したことは3．1で既に述べた。

志向の安定性の点からは「簡略化」「詳細化」「無」の3タイプはいずれも登場人物2人の描写の志向が一致しており、安定していると考えられるが、「その他」のタイプは描写の志向が一致しておらず、安定していない。これが全体の32％というのは少ない数字ではないであろう。

5．2　伝達の促進について

ＦＴの主な機能は伝達の促進である。今回の研究からはＦＴにより伝達が促進されたのかどうか、その効果を測ることはできない。しかし、少なくとも伝達を促進しようとしたのかどうかについてはある程度推測することができると考える。それは接触場面と母語場面に伝達内容に差異が認められるかどうかでそれが判断できるからである。

何らかの形で伝達を促進しようとしたのは接触場面と母語場面に差異が見られなかった「無志向」タイプ以外の「簡略化志向」「詳細化志向」「その他」のタイプである。この3タイプは合わせて60％になり、志向やその安定性に違いは見られるものの、接触場面の時には母語場面とは異なることをしたことがわかる。しかし、残りの40％の被験者は接触場面であっても母語場面であっても同じことをしており、伝達を促進しようとしたとは考えにくい[6]。この40％という数字も5．1と同様、少ない数字ではないだろう。

6．まとめと今後の課題

本研究ではＮＳの個人差に焦点を当てて発話資料を分析したところ、次のようなことがわかった。

（１）ＮＳは発話資料収集が社会言語学的に統制された場面であっても、ＦＴを行ったＮＳ（60%）と行わなかったＮＳ（40%）がいた。
（２）ＦＴを行う人にも「簡略化」を志向するタイプ、「詳細化」を志向するタイプ、その両方が見られる志向性が安定しないタイプがいた。
（３）先行研究などで言われている[7]「簡略化」を志向するタイプは本研究では一番少ないタイプであり、全体の８％に過ぎなかった。

ＮＳと一口に言っても、そのＦＴには個人差があり、その様相は様々である。Long（1983）及び町田（1995）で指摘されているように、ＦＴは個人差によるところが大きいことを発話資料を持って示すことができたが、次に考えなければならないことはなぜこのような結果になったのかということであろう。

日本語のＦＴの研究はスクータリデス（1981）によって日本語にもＦＴが存在することが実証されたことから始まり、多くの研究がなされてきたが、尾崎（1999）の指摘にもあるように研究課題が多く残されている。ＦＴの上手下手だけではなく、同じような状況においてもＦＴを行う者と行わない者がいることは、今後ＦＴを研究する場合だけでなく、接触場面をＮＮＳの側から研究する場合にも考慮されなければならないことであろう。

注

１）村上（1996）、大平（1999）には特にＦＴの研究であるとは書かれていないが、接触場面におけるＮＳ側の研究であることからＦＴの研究と考えた。
２）仏語の講義では英語の教科書の仏語訳版が使用された。
３）資料収集のくわしい方法については小林（1996）を参照。
４）調査終了時に事情を説明し、承諾を得た。
５）ＦＴの特徴が最も現れやすいのは語彙であるという指摘もある（スクータリデス

1988)。

6）言葉に表れなかったことを言っているのであり、意識レベルのことを言っているのではない。意識レベルについて調査した研究には一二三（1995）がある。

7）ＦＴはベイビー・トーク（Baby Talk)、ティーチャー・トーク（Teacher Talk）とともに「簡略化された言語使用域（Simplified Resister)」と言われており、簡略化が志向されると考えられている。

参考文献

大平未央子（1999)「日本語母語話者の言い直し —接触場面緒における方法と効果—」『平成11年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、185-190

尾崎明人（1999)「フォリナー・トークの功罪」『言語』第28巻第4号、68-69

小林浩明(1996)『日本語におけるフォリナー・トークの記述及び分析方法に関する基礎的研究』名古屋大学修士学位論文

スクータリデス、アリーナ（1981)「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45号、53-62

スクータリデス、アリーナ（1988)「日本人が外国人と話す時」『国文学　解釈と鑑賞』第53巻1号、118-125

一二三朋子（1995)「母国語話者と非母国語話者との会話における母国語話者側の意識的配慮の検討」『教育心理学研究』第43巻第3号、40-49

町田延代（1995)「電話のおける日本語のフォリナー・トーク・ディスコース：非母語話者の言語能力と調整・交渉」『南山日本語教育』第2号, 50-78

宮本節子（1996)「6　言語の状況差・適切さ」田中春美・田中幸子編著『社会言語学への招待—社会・文化・コミュニケーション—』ミネルヴァ書房、96-110

村上かおり（1996)「日本語における母語話者と非母語話者とのインターアクション—非母語話者との接触経験が母語話者の『意味交渉』に与える影響—」『平成8年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、175-180

Long, M.H. (1983) Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers. Studies in Second Language Acquisition 5.2, 177-193

Wells, T. (1986) *Speaking for communication*. International Communications Inc.

Wesche, M and Ready, D (1985) Foreigner talk in the university classroom. In Gass, S and Madden,C (eds.) *Input in second language acquisition*. Newbury House. Rowley, Mass.

〈キーワード〉フォリナー・トーク，母語話者の個人差，簡略化，詳述化

Individual Differences in Japanese Foreigner Talk

Hiroaki KOBAYASHI

The porpose of this paper is to reveal individual differences in Japanese foreigner talk (FT). Twenty-five native speakers of Japanese described a comic strip twice; once to a native speaker of Japanese (NS) and to a non-native speaker (NNS) at another time. The fifty stories were analyzed in terms of simplicity of expressions, a feature of FT which previous studies observed. The result indicates that (1) difference in simplicity between NS-NS and NS-NNS discourses was only found in fifteen subjects (60%) wheares the remaining ten (40%) did not show any difference, (2) those who changed their style either 1) simplified, 2) elaborated, or 3) partly simplified and partly elaborated their expressions, (3) only two subjects (8%) consistently simplified their talk as previous studies have claimed.